

ある近江商人の高 ROE 経営を支えた複式簿記と「三方よし」精神

「古文書が読めるようになった」

あのミミズの這いまわった字を読めるようになったとは、その努力に感服します。

記事中にはバランス・シートを基本とした複式簿記と記されているので、近江商人はすでに利益を生み出す仕組み、そして経営を継続していく方法を理解し使いこなしていたことは間違いないでしょう。複式簿記 (Wikipedia) には次のように記されているので、近江商人の先見性が見て取れます。

日本においては江戸時代には大福帳 (売掛金元帳) などによる算盤使用に適した独自の帳簿システムが確立しており、その中には複式簿記の萌芽も見られたが、本格的な複式簿記の導入は欧米からの導入によるものであり、明治6年 (1873年)。

物のない江戸時代において、薄利多売は消費者に喜ばれ支持されたこと

でしょう。記事中には「経営価値と社会価値は一体という教訓」とあり、これが三方よしの近江商人の神髄。

そして現代、ものあふれる時代の商人はどのように生きるべきか？ 社会が求め社会と共存できることは最低必須条件として、それを実現していくためのビジネスモデルとはどのようなものであるべきか？ これに解答を出せる企業が生き残り、利益を出していきける。

日本経済新聞 2019.9.3

一目均衡

証券部次長 松崎 雄典

「古文書が読めるようになった」
 「古文書が読めるようになった」
 しました。ファイリテイ投
 信で企業との対話を担当する
 三瓶裕喜氏は笑う。
 三瓶氏は日本企業の原点を
 探ると「売り手」「買い手」
 「世間」の「三方よし」で知
 った。一例とほいえ、平均10%
 未満の現代の日本企業より
 も、長期で高い実績を残した
 ケースがあったわけだ。
 顧客や世間といったステーク
 ホルダー(利害関係者)に
 配慮する経営と株主重視のR
 O E 経営は相反すると思えら
 れがちだが、三方よしの近江
 商人でも高ROE経営を実現
 した例があったのは「経済価
 値と社会価値は一体という教
 訓」(三瓶氏)を示す。
 商売の実態は農家の三男や
 四男による商人相手の御行商
 だった。近江の物産を他国に
 売り、他国の物産を持ち帰る。
 会計の違いを調整するともっ
 と高かった可能性もあつてい
 藩には保護されずリスクは高
 かった。他国で受け入れられ
 るには取引相手にもその地域
 の人々にも喜ばれるものでな
 くてはならない。もしもの備
 えに内部留保も必要だ。質素
 △があった。60年代には企
 業が不採算部門を抱えて非効
 率化し、70、80年代には株主
 の力が強くなってM&A(合
 併・買収)がさかんになった。
 最近では、富が偏在して消費
 米国企業の歴史を振り返
 と、1950年代には、従業
 員が自動車を買えるよう高い
 賃金を支払う「フォードイ
 △があった。60年代には企
 業が不採算部門を抱えて非効
 率化し、70、80年代には株主
 の力が強くなってM&A(合
 併・買収)がさかんになった。
 最近では、富が偏在して消費
 米国の経済団体は8月、株
 主第一主義を見直し、従業員
 はなく、時代によって企業に
 求められる姿は変わる」と話
 す。日本企業の課題も米国と
 は異なるという。ROEは海
 外に比べてなお低い。世の中
 が求める製品やサービスを生
 めず過当競争の産業が多く利
 益率が低いからだ。企業は利
 益を出してもお金を使わず、
 ため込んでいる。供給網での
 環境・人権問題への目配りも
 欧米が先を行く。
 優れた近江商人のように企
 業活動は社会に喜ばれながら
 利益も生む。米国の転換を利
 益は大切ではない」と捉える
 と間違いを犯してしまう。

ある近江商人の高ROE経営